

3 授業改善のポイント

「1 研究の概要」で述べたように学習状況調査から見える課題は以下の3点です。

学習状況調査から見える小学校国語科の課題

- ①中心となる語や文を捉えて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと
- ②自分の考えを求められた様式に合わせて書くこと
- ③文章の内容を的確に捉えて、要旨をまとめること

この課題を解決するために、教育センターとして授業改善に必要なアイデアを4つ紹介します。

授業改善に必要なアイデア

- ア 児童に見通しをもたせ、主体的な学びをつくること
- イ 単元を通して言語活動を位置付けて授業を行っていくこと
- ウ 自分の考えを広げたり深めたりさせる話し合いを授業に取り入れること
- エ 学びを自覚させる振り返りを取り入れること



上記のアイデアを生かして授業をする際には、「児童に付けたい力を確実に付ける単元を構想すること」という意識をもつことが大前提です。

では、「児童に付けたい力を確実に付ける単元を構想すること」を意識せずに授業を行うとどうなるのでしょうか。おそらく、小刻みな発問を繰り返し、児童はその発問に対する答えのみを探すようになるでしょう。「なぜ、その発問に対する答えを考えなければならないのか」「その答えは、何に結び付いているのか」など、児童が考える目的を理解することなく学習を進めていけば、児童が、自らの学びを振り返ったときに「学習を通して何が分かり、何ができるようになったか」ではなく、「答えが分かったか」ということを振り返る視点としてしまうかもしれません。「考えたことで、〇〇ができるようになったよ」と自信を付ける機会を逃し、「間違っただけはずかしいな」と不安になるかもしれません。

小刻みな発問中心の授業は、1単位時間を輪切りにして、文章を段落ごとに区切って読んだり、1単元を輪切りにして、1単位時間ごとのめあてに沿った学習で終わったりするかもしれません。それでは、単元を通して言語活動を位置付けていても、児童が単元のゴールに向かって、主体的に学ぶ姿は見られないでしょう。

したがって、授業改善を効果的に行うには「単元づくり」を改善していく必要があります。「単元で学ぶ」という意識をもって単元を構想するように心掛けましょう。

「授業改善に必要なアイデア」を基盤として、「単元で学び、単元で力を付ける授業」を目指すには、具体的にどのように単元づくりをしていけばよいのでしょうか。これについては、「授業改善に必要なアイデア」の項目ごとに「単元づくりのポイント」にまとめています。佐賀大学教育学部の達富洋二教授からアドバイスを頂いたことも紹介しています。ぜひ、参考にされて単元づくりを行ってみてください。

(1) 単元づくりのポイント

小学校国語科において、単元を大きく第一次、二次、三次と分けて指導することが多く見受けられます。

まず、第一次においては、単元を通した言語活動を位置付けて学習課題、学習計画を立てることが基本的な流れとなります。その際、児童が見通しをもって学習に取り組めるように言語活動モデルを示すことが有効です。

次に、第二次においては「読むこと」を例に出して考えてみることにします。単元を通した言語活動と教材文の読み取りが乖離しないように、目的や必然性のある読みを児童に行わせていきましょう。その際に思考を深めるような手立てを工夫していくことが大切です。



最後に、第三次においては、これまでの単元を振り返り、学習の成果が自覚できる発表会や、単元を振り返り、どのような力が付いたのかを児童にメタ認知させることが大切です。

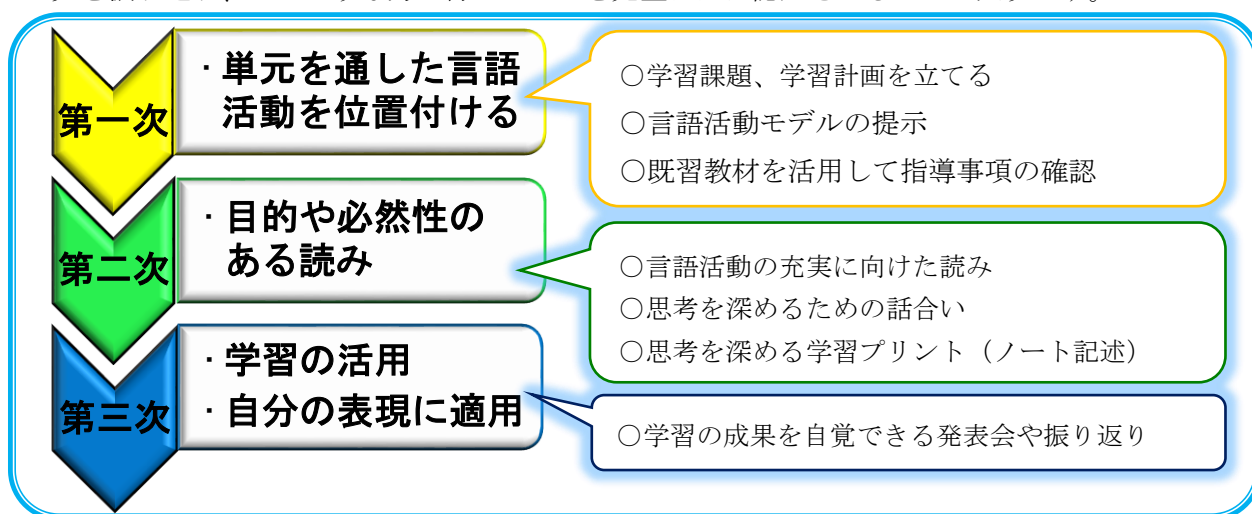


図1 単元構想の概要

ア 児童に見通しをもたせ、主体的な学びをつくること

単元導入時には学習課題を設定することが大切です。教室では「単元のめあて」と呼ぶこともあるかと思います。児童が単元を通して主体的に学び、その単元で付ける力を確かに付けるために重要なことです。学習課題を考える時には、指導事項と単元を通して位置付ける言語活動を取り入れて設定するようにしましょう。さらに、児童がどのように思考して学習を進めていけばよいのか示すために、思考操作動詞を取り入れると効果的です。これについては達富教授からアドバイスを頂いているので、ぜひお読みください。

学習課題を設定した後には、教師が言語活動モデルを示すことをお勧めします。単元を通した言語活動を設定して児童に「パンフレットを作ろう」などと話すだけでは、単元末にどのようなゴールが待っているのか見通しがもてません。言語活動モデルを示すことで、児童は目的を明確にして単元の学習を進めていくことができるでしょう。

また、既習教材を副教材として用いて学び方を確認することも主体的な学びを促すために意義あることです。説明的な文章を例にすると、低学年で学んだ「問いと答え」を既習教材で復習して、中学年の教材で文章の構成を捉える際に生かさせることなどが挙げられます。





学習課題を立てる際には、「指導事項」「思考操作」「言語活動」の3つの事柄を組み合わせ設定します。

まず、付ける力を学習指導要領に示されている指導事項に準拠して明確にします。次に、児童がそれを主体的に学ぶことができるのにふさわしい言語活動を設定

します。そのときに、その言語活動を価値ある学習として実現するための思考操作を具体的に示します。「指導事項」「思考操作」「言語活動」の順に一文にすると児童に伝わりやすくなります。高学年の物語を「読むこと」では、「登場人物の言動の意味について考える」学習を設定することがあります。この場合には、《【指導事項】「命シリーズ」の登場人物の関係やそれについての自分の考えを、【思考操作】物語の出来事と会話文とを関係付けて、【言語活動】新聞の人物紹介欄のように書く。》というように設定すると分かりやすくなります。

学習課題のつくり方

○ステップ1 指導事項、思考操作、言語活動を選択する

- ・指導事項…学習指導要領の指導事項から選びます。
- ・思考操作…「考える」の一步先の言葉を選びます。

見つける	収集する	配列する	組み合わせる	予想する
比べる				
選ぶ	区別する	分類する	関係付ける	多面的に見る
条件付ける・関連付ける・統合する				
確認する・決定する				
評価する・一般化する・具現化する・抽象化する				
帰納する・演繹する				

図2 思考行為動詞

- ・言語活動…付きたい力に結び付く子供の文化に沿った言語活動を選びます。

○ステップ2 指導事項、思考操作、言語活動を組み合わせる

「－A－について(を)、－B－をして、－C－する」
 (指導事項) (思考操作) (言語活動)

このように表現するのが基本です。例えば、「読むこと」の領域で、「海の命」（光村図書6年）の教材で学習課題を考えてみます。

- A 登場人物の人間関係について
 B できごとと会話文とを関係付けて
 C 「ひと」コラムを書く

- A 「命シリーズ」の登場人物の関係やそれについての自分の考えを、
 B 物語のできごとと会話文とを関係付けて、
 C 新聞の人物紹介欄のように書く。

学習課題の表現を児童の実態に合った文言に書き直すと具体的な学習課題となります。
 学習課題を設定して、児童に見通しをもたせて学習に臨ませます。

イ 単元を通して言語活動を位置付けて授業を行っていくこと

国語科は言語活動を通して指導事項等を指導する教科だと言えます。その際、指導事項を焦点化し、単元を通して一貫した言語活動を位置付けることが大きな指導効果を生み出します。言語活動を行う過程が、児童にとっての課題解決の過程となるようにし、主体的な思考・判断を伴う学びを成立させて、国語科の指導事項を確実に身に付けさせていきましょう。「読むこと」において、単元を通して言語活動を位置付けた単元構想のイメージは次のようになります。

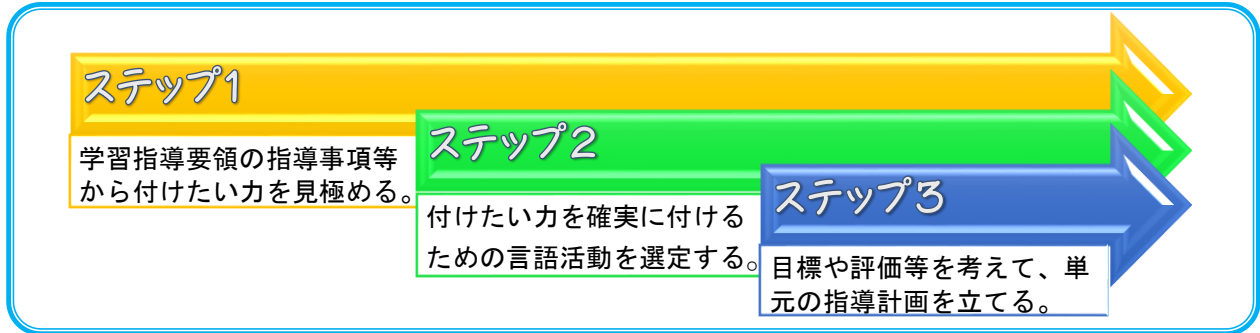


図3 単元を通した言語活動を位置付ける流れ

ウ 自分の考えを広げたり深めたりする話し合いを取り入れること


授業で話し合いをしない学びは考えにくいと思います。では、なぜ話し合いを取り入れるのでしょうか。小学校国語科の「話すこと・聞くこと」では、「話し合うこと」が指導事項として挙げられています。ここでは、進行に沿って話し合うことや立場をはっきりさせながら、計画的に話し合うことなどの指導が求められています。「書くこと」、「読むこと」領域においては単に話し合いの指導ではなく、「交流」として指導事項が存在しています。

本研究の話し合いでは児童自身の考えを広げたり深めたりすることを目的とします。「考えを広める」とは、否定や批判をせず、相手の考えを受け入れながら自由に考えを出し合い、知識や考えの幅を広げることと考えます。「考えを深める」とは、情報や考えが正確か、適切かといった観点で吟味していくことだと考えます。

では、形態はどうすればよいのでしょうか。ペアやグループ、学級全体、ワールド・カフェ形式、ジグソー学習など様々です。ここで大切なのは話し合いを取り入れる目的や意図、発達段階を考慮することです。

このように話し合いを授業に位置付けて、単元で付ける力を高める話し合いにしていきましょう。





達富教授に聞いてみよう！
教えて！授業改善のポイント！

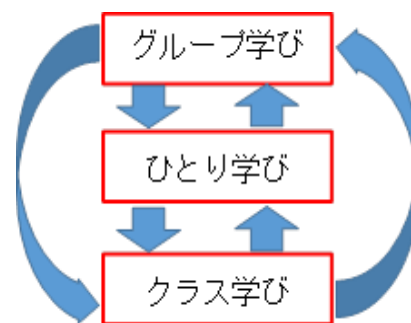
達富教授の「学びとき・教えとき」

小学校国語

「協働して学ぶこと」を考えていくようになると、これまでよりも質の高いグループ学びに期待が高まっていくでしょう。グループ学びは複数の児童がただ集まるだけではありません。例えば「話し合い」であっても、そこには目的と具体的な方法が必要です。よく見掛けるのは「話し合い」になっていない単なる「報告会」です。

誰もが「話し合ってよかった」「話し合ったことで分かった」というように、話し合いの成果

をもつようにしたいものです。そのためには、「分かったことを教え合う」ことだけではなく、「分からないことを学び合う」という考え方が必要です。グループ学びが形式的にならないようにすることが大切です。グループでの話し合いの前に、各自が話し合うことを書いておくこともありますが、書くことで学び合いになりにくいこともあります。書いた内容に固執してしまう児童や、初めに書いたことで解決したと考え片付けてしまう児童にとっては、グループ学びが形式的なものになることがあります。一人で考えを書いたものを基にして、その後のグループ学びを行うことで、いろいろな考え方に触れたり、自分の考えをよりよいものに作り換えたりすることができることを意識付け、単元を通じた学習計画を児童に自覚させる必要があります。



エ 学びを自覚する振り返りを取り入れること

- ①「この学習で、分かったこと（知ったこと）は何か」
- ②「この学習で、自分にどんな力がついたのか」



本研究では、振り返りとして授業の感想を書くだけではなく、この2つの視点で振り返りを行いました。①では、学習で用いた用語や、学習のキーワードを使って、まとめさせる（話す・書く）ようにしました。②では、単元を通してどのような力が付いたのかを児童に自己評価させ、メタ認知させるようにしました。



振り返りには、単元を通じた振り返りと、本時の振り返りがありますが、どちらの場合でも学習課題に沿った振り返りを行うことが大切です。例えば、「物語の出来事と会話を関係付けて登場人物の関係を考える」ことについての学習であったにもかかわらず、「大きな声で発表できたからよかった」という振り返りをする児童は

いませんか。この振り返りは、適切とは言えません。

ひとつの方法として、その日の授業（あるいはその単元）における指導事項や思考操作などを表す学習用語を使って振り返りを行うことは効果的です。

授業に必要なアイデアにある「学習課題」の【例】で言えば「会話文」「登場人物の関係」「関連付ける」というような用語です。ただし、注意しなければならないのは、「登場人物の関係を考えるとき、会話文と関連付けると分かったのでよかったです」というように、その用語を使いさえすればいいというものではないということです。「登場人物同士の《おまえは〜だよ》と《～感謝しております》という会話文やその前後の描写を関連付けると、二人の関係は《信頼し合っている》ということが分かり、わたしが初めに感じた物語全体の印象とぴったり合うわけを見付けることができました」というように、会話文とその用語を「自分の学習の文脈」と重ねて振り返ることが必要です。

(2) 単元づくりの際に取り入れたいこと

○学習読書（並行読書）

本研究では、趣味の読書と区別した読書という意味で、「**学習読書（並行読書）**」と名付けた読書を、意図的に取り組ませていくことにしました。学校図書館にある本だけでは、質、量ともに不足する場合があります。本研究では、地域の図書館と連携し、児童がゆとりをもって並行読書ができるように環境を整えました。単元のねらいに応じて、選書し、早めに環境を整えるようにしたいものです。



単元の学習と並行して行う読書を趣味の読書と区別して「**学習読書**」と呼ぶことにします。

「学習読書」は、その単元で付ける力をより効果的に習得するためのものですから計画的に設定する必要があります。

指導計画の第二次で教科書の物語の紹介文を書き、第三次で他の物語の紹介をする場合であっても、第二次が終わってから読書を始めたのでは効果は上がりません。第三次の作品づくりのための読書ではなく、単元を通して習得する力を他の場面でもはたかせて習熟するためのものですから、単元が始まったときや単元が始まる前から読書を始めることがあってもいいわけです。どのような本を読むかということについても、教師の意図を明確にして、単元の目標に合ったものを設定する必要があります。

○評価

本研究では、単元で付いた力を的確に評価するために「評価テスト」を作成しました。

大問1・・・授業を受けたからこそ解ける問題
大問2・・・単元を通して付いた力を活用して解く問題



国語科の評価は、言語活動が中心となった場合、その多くは、行動観察とワークシートやノートに書かれた記述内容の分析となります。本研究では、さらに、単元後の評価テストを作成し、実施しました。単元を通して評価するための方法として、観察、記述や発言内容、作品の内容等に加え、評価テストを取り入れ、総括的に評価することとしました。



評価について考えるときは、評価規準と評価方法を合わせて考えることが必要ですが、何より大切なのは、単元を始める前に単元を通した評価計画を立てて評価のための具体的な方法（規準表）をもっていることです。

評価計画が曖昧なまま単元を進めてしまうと、結局、印象に残ったことや作品だけを評価することになってしまいます。評価計画をもっていると、見えるものだけではなく、学習状況に即して評価しなければならないものを漏らさず見ることができます。また、今後はアクティブ・ラーニングの視点に基づいた個人の評価とグループの評価の規準と方法も具体化させておく必要があります。